

かす が いら かま あと ぐん カスガ入窯跡群

もとぬま
栃木県芳賀郡益子町大字本沼

現地説明会資料 令和3（2021）年2月20日（土）
栃木県教育委員会事務局 文化財課
宇都宮市埴田1-1-20 TEL 028-623-3425
公益財団法人とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
下野市紫474 TEL 0285-44-8441
<http://www.maibun.or.jp>

カスガ入窯跡群は、益子町南西部、丘陵の沢添いにある古代の窯跡群です。この窯跡群は、栃木県の歴史を伝える遺跡として、昭和52（1977）年に益子町の指定史跡となり、昭和57（1982）年には県の重要遺跡にも選定されています。県教育委員会では、昨年度から重要遺跡等範囲確認調査として、この窯跡群の調査を実施してきました。この調査で、貴重な遺構・遺物が確認されましたので、地域の皆様に説明会を実施することになりました。

窯跡は、東に開ける沢の南斜面にあり、須恵器すえきという器かわらや瓦を焼いた窯、燃やした薪の灰や失敗品を棄てた灰原はいばらが確認されました。窯跡は幅1m、長さ4mほどで、斜面に細長い穴を掘って窯の下半部を作り、土でその上を覆い、天井とした窖窯あながまです。

窯の側面には藁わらを入れた土を3回貼っており、壁に土を貼り直して何度も火入れしていたことがわかりました。また、床には傾斜があつて、窯の先端部には器を焼き並べるための台やきだい（焼台）が列になって確認されました。薪を焚いた近くには焼台がなく、大きな容器かめ（甕）などは窯の手前に、小型の食器つき（坏・皿など）は奥に並べて焼いたと考えられます。



カスガ入窯跡は本沼窯跡群の一部です



窯跡の調査の様子

黒線の内側が窯跡です。
天井は失われ、床の部分が残ります。
写真は、調査のため、窯跡をタテ方向に二分したうちの右半分を掘った様子です。内部の土の壁は、土の堆積を調査するためのものです。
よく見ると、火入れによって、土が赤く変色しているところがあります。

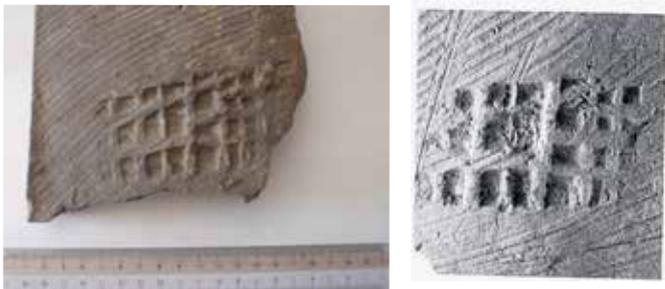


古代の窯場 想定図

図は、内部の様子がわかるように天井部分を開けてあります。

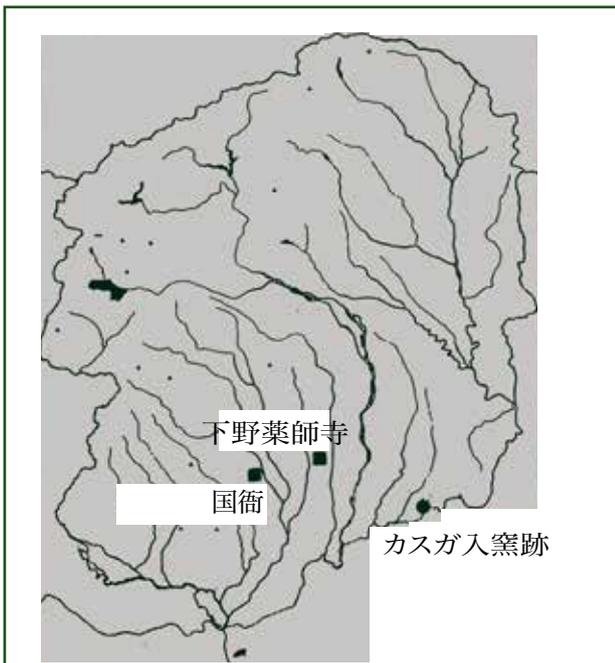
灰原は幅 10mほどで、斜面下に向かって裾広がりになっています。ここからは日常使用する焼物（坏・皿・蓋・壺・甕）で割れた物や焼きゆがんだ失敗品が多く出土しました。優良品は製品として出荷されたと考えられます。須恵器は形などの特徴から平安時代初め（9世紀前半）頃のものだと判断されます。

瓦も多量に出土し、須恵器とともに瓦を焼いていたことがわかりました。瓦を造った時の叩き具が格子模様になっており、その特徴が下野市にある下野薬師寺跡で出土した瓦にも確認できます。ここで焼かれた瓦は、薬師寺まで運ばれて屋根に葺かれたことが明らかになりました。



格子模様の瓦 左:今回の調査 右:薬師寺跡

薬師寺は、日本における東方の仏教政策の中核となる寺院であり、荘厳な建物が軒を連ね、現在の県の役所に当たる国衙が管理していました。奈良時代初め頃には薬師寺の建物が整備されたことから、平安時代初めに造られたこの瓦は、修理用に国衙から発注されたと推定されます。



灰原 瓦や須恵器の破片が散らばっています



下野薬師寺想定復元(出典:『ビジュアル下野薬師寺』)



小泉分校裏遺跡 大型掘立柱建物跡

また、北東 1.5 kmほどにある小泉分校裏遺跡では同じ頃の大型掘立柱建物群が確認され、窯の経営に係わった富裕層の遺跡と推定されています。

瓦を生産するカスガ入窯跡群、その窯を経営する層、瓦を発注する国衙、国衙が管理する薬師寺の関係が、瓦を通して想定できるようになりました。